

になるところであった。また、リモートセンシングの解析研究を手広く行っている東海大学の充実した設備には驚かされた。

講義の内容は、リモートセンシングの基本原理に始まって、データの処理システム（ハードウェアとソフトウェア）、写真判読、ランドトランスデータ、画像のエンハンスメント、リモートセンシングの応用、画像処理の数学的手法、マイクロ波イメージング、気象衛星の地上処理システムに至る、実に多岐にわたった、必要にして十分なプログラムであった。日本では優秀なCCD素子カメラが開発されても、それを搭載する航空機や、航空機の専用滑走路がないこと（MOS-1にはCCDセンサーが搭載されることになっている）、また同じく日本では合成開口レーダーを使える飛行機がなく、カナダから借りてくる事情からマイクロウェーブを利用したリモートセンシングの応用では日本がまだ初歩の段階であることなど、日本におけるリモートセンシング技術の実用の立ちおくれについて、講師の先生方が訴えられていたのが印象に残った。また、日本人はとかく解析の精度を問題にするが、アメリカではむしろ時系列的な変化に主眼をおいて実用化しているとのこと、やはり国土のスケールの違いがこういうところにも現われているようだ。

後半の7日間は港区六本木のリモートセンシング技術センター（RESTEC）と株式会社ナック（NAC）において、リモートセンシングデータのデジタル解析とアナログ解析が行なわれた。中でも、今回から取り入れられたパソコンを使った解析実習は、わずか1日という限られた時間であったが、受講者の研究機関の実情に最も即しており、今後習得した技術を活用する上で、たいへん有意義だった。

デジタル解析実習では、リモートセンシング解析用に設計された2つの機種、IMAGE100とMDASを使い、以下の課題が与えられた。課題その1『航空機MSSのデータを解析し、3つの地域（富山湾、富山県上市市、愛知県佐久島）を対象に、それぞれの土地被覆状況と温度分布の関係を考察せよ』、課題その2『ランドサット・MSSデータを使用し、4つの都市（札幌、東京、京都、北九州）について土地利用を分析し、都市環境について考察せよ』。機械の操作を覚えるのに半日を費やしたが、技術そのものより得られた結果をいかに解析、評価するかがキーポイントである。その意味で、リモートセンシングの解析には地理学の知識は不可欠であることを感じた。

大学にもどってから教室のパソコンのシステム（NEC 9801）を使ってランドサットデータの画像処理の一例を試みたが、200本の走査線（高解像ディスプレイを用いれば400本）を画面に出すのに5～6分かかった。くる日もくる日も土地利用分類ばかりで癖易していた頃にはわからなかったが、RESTECのIMAGE100やMDAS（ハードウェアで計算処理され、瞬時にフォルスカラー合成や、カラーレベルスライスをやってのける）システムのすばらしさが後になってわかった。

連日、朝9時から夕方5時までの研修はきつかった（とくに最終報告書を提出する時には、精も根も尽きた）けれども、修了証を手にするまではと、必死でがんばったのは、自動車免許取得と教育実習以来のように思う。久々に充実感を味わうことができた。なお、今回の研修の参加をお許しいただいた教室の先生方、そして助手室不在中にお世話になった教務補佐の方々には、この場を借りて感謝の意を表したい。

## ムングァ（今日は）・貴州の苗族

江波戸 昭

去る12月17日、天候不順で広州空港に4時間も足どめされたわれわれ“地理学訪中団”の一行は、ようやく飛来した4発のプロペラ機に乗って西へ2時間、暗雲を抜けたとたんに着陸という巧技に助けられて貴陽空港に降り立つことができた。広州と違って変わった身を切るような寒風に一同とまどいの表情、気温は2℃だという。出迎への通訳、大学出たての若い何鳴さんに先導されてバスに乗り、宿舎の花溪賓館に着いた。

翌朝も空はどんより、「天に三日の陽光なく、地に三

里の平地なく、民に三文の富財なし」という諺どおりの貴州省だ。「陽光が貴いのでこの名がついたのです」といわれる人口80万の省都貴陽の町もその郊外の農村も、心なしか暗いたたずまいだ。黒っぽい瓦やスレート、鉄平石的なうすい石を並べた屋根のためもあるが、とにかく貧しさを感じさせる。

その日の行程は、貴陽から苗族の居住する中心地凱里まで、東へ150kmほどの道のりながら、標高千メートルをこえる峠越えの山道つづきで、事故にまき込まれたこ

とも加わり5時間半、トウモロコシやタバコの刈り跡が残る急斜面の山畑や霧氷の花咲く樹林をぬけて、ようやく凱里第一招待所で暖い火鍋の昼食にありついたのはもう4時をまわっていた。この招待所にはすでに何組かの日本人団体客が訪れてはいるが、いずれも民俗学や社会学系の大先生方のグループで、若者、とくに女性の来訪は初めてとのこと、まさに“熱烈歓迎”そのもので、はからずもお茶大生を加えた旅の余得を堪能させていた。

翌19日が今回のおめあて、苗族の村にはいる日だ。凍てついた道をスリップしないようにそろそろと走って郊外に出、9時に金井村小坳寨(120戸、650人)に到着。集会所的な小さな広場をもった家に招き入れられる。炭火を囲んで村の話などを村長さんから聞いているうちに、広場に櫓を組んで銅鼓が吊り下げられ、木桶と組み合わせて音色にアヤをつけたその音が、ふれ太鼓のように村に響きわたりはじめた。雅楽の篇の元祖といわれる芦笙の音も聞こえてくる。やがて銀製の大きな冠や頸飾、それに極彩色の刺繍で全身を飾り立てた6人の15~16歳ほどの姑娘たちが御登場、控えの間で老女たちに改めて入念に着付けをされて、銅鼓舞が始まった。この辺りからインドシナ半島北部一帯にかけて愛用されている青銅製の大型ゴングの銅鼓のリズムに合わせて、互に手をつなぎ、その周辺を単純なステップでゆっくりと時計と反対廻りで廻っていく盆踊り風の踊りだ。若者2人が吹く一対の芦笙が入る芦笙舞になると、ステップに多少とも動きが出てくる。村の人たちも時ならぬ祭りに総出で見物だ。刺繍をしたネンネコで赤ん坊を背負った若妻の姿が日本人そっくりである。

踊りがえんえんとつづくので、失礼して抜け出し、村をひと廻り。門神の貼られた民家の玄関をはいるとすぐが堂室で、正面に神棚的な祭壇がしつらえられ、「天地国親師位」と書いた紙が吊るされ、もろもろの大切なものを一把ひとからげにして拝むようになっている。客が来るとその前に坐って酒をくみ交わす。この寒さだというのに、台所のかまどの火の他、火の気がまずみられない。風通しの良い部屋の片隅にポツンとベッドが置かれている。学校帰りの子供たちは、小さなガンガラに炭火を入れて紐をつけ、それを振り廻して火が消えないようにしながら暖をとり、歩いている。このあたり一帯は紅旗人民公社(すでに行政区画としての意味はない)に属し、市街地に近いため、白菜・大根など高冷地野菜の生産が主で、米は自給用にすぎない。秋野菜の残りか、まだ白菜の収穫や出荷が結構行われていた。

日は照らないながら、ようやく凍てついた道がとけ出して、ぬかるみ状になった道を歩いて、村の生活の一端にふれていると、上の方から呼ぶ声が聞こえてきた。踊りが終わって食事の仕度が出来たようである。例の建物に戻ってみると、門前に関所が設けられて、民族衣装のおばさんや娘さんたちが待ち構えている。“団長さんからどうぞ”といわれるままに進み出ると、おばさんはにこやかに度の強い米酒を盃になみなみと注ぎ、否応なしに私の口に流しこんだ。それも一杯では駄目で、二杯飲まなければいけないという。そしてついでに豚の脂身を炒めた一片を口にほうりこんでくれる。その間、こちらからは手を出せない。この種の“進門酒”といわれる歓迎の儀式があることは、すでに文献で知ってはいたものの、これほどに“強制的”であるとは思っていなかった。しかも門を入ると次いで玄関でまたもや第二陣が待ち構えていて、かん高い声のグリッサンドのコーダがついた迎客歌とともに、再度の洗礼だ。ようやく家に入れてもらった学生の間では早くも“モウ、シンダノ”の声も。

かくして始まった苗族、侗族、倭族(?)いり乱れての大宴会。当地の名酒「窖酒」(貴州は例の茅台酒の産地だが、これは西部のもの)の乾杯を合図に、鶏肉のそばろにうす焼卵をロールに巻いた前菜を手始めとして、各種の肉、魚、野菜の手のこんだ料理がぞくぞくと運びこまれてくる。米飯はジャポニカ系の品種・(料理については、お茶大から参加の4人組の記録「中華風養豚旅行記」に詳しいので参照されたい)

飲むにつれ、食べるにつれ、歌も出る。山に登っての游方(歌垣)で幼い時から鍛えぬいているためか、かん高い声で朗唱風の民謡を歌うおばさんたちの歌はとくに迫力満点だ。ところが歌ってくれるように頼むと、手にしたれんげで、また例の調子で飲まされる。歌うのはわれわれが“三婆”と悼名した3人の陽気なおばさんだからたまらない。1曲録音を採ろうとすると6杯飲まされるはめに陥る。そして最後はお別れの“出門酒”とあって、バスの中まで追いかけて来ての振舞酒だ。バスが動き出して村を出、ホッとしたとたんに眠りこんでしまったのは貴重な初体験。

その晩はまた、地元のトップ・クラスの歌手・演奏家を呼び集めての交歓会。少数民族の地を訪れたより少数の“倭族”の一行は、寒さも忘れて共に歌い踊り、楽しんだ。そして、この豊かな伝統文化のなかに明かるく生きる人びとの暖かな応待にすっかり満足して、翌朝、貴州に別れを告げ、広西への汽車の旅に出たのだった。

(明治大学)